
魔法少女リリカルなのは～もう一人の火竜～

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜もう一人の火竜〜

【Nコード】

N8474Y

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

11年前に消えた少年が、戻ってきたとき、混沌と破壊の戦いが始まる。はたして少年たちの未来は？

第1話＋プロローグ

11年前、一人の少年が突然開いた穴から3人の少女を守るために、自ら犠牲となりその世界からいなくなった。それから11年後、

「何とか、マグノリアに戻ってこれたな。リサーナも無事だったし」

ある青年がそう言った

「そうだな」

紅い長髪の女性、エルザがそう言った

「何はともあれ、早くギルドに戻ろうぜ」

上衣を着ていない、黒髪の男性グレイがそう言った

「ミラさん達嬉しそう」

金色の長髪の女性、ルーシイが言った

「あい」

青い猫、ハッピーもルーシイの意見に賛成した

「それよか、じっちゃんに何て言えばいいんだ？」

桜色の髪 of 男性、ナツがそう言った

ルーシイ：「ありのままを言うしかないんじゃない？」

グレイ：「嫌、皆気づいてねえだろう？ 今回の件」

エルザ：「しかし、ミストガンの事だけは黙っておけんぞ」

「つま、なるようになるだろう。それより、早く行こうぜ」

青年がそう言った時

「・・・さん、体が！？」

「うん？」

ツインテールをした少女、ウェンディに言われ、青年が自分の身体を見ると

「なんじゃこりゃー!？」

体が光っており、その光は空にある黒い空間に向かっていた

ナツ：「おい、おい、どうなってんだこれ!？」

グレイ：「俺が知るわけねえだろう!？」

「（この感覚は11年前のあの時と同じ感覚）……………そうか、
そう言うことか」

青年は理解したのか、笑っていた

エルザ：「……………何か解ったのか!？」

「ああ。俺が此処とは違う世界から来たってことは前に言っただけだよ。俺は元いた世界に帰らなきゃいけないみたいだ」

「っ!?!??」

「もう少し、此処にいたかったんだけどな。こればかりはしょうがないな」

青年は苦笑いをした

ナツ：「消えんじゃねえよ!まだ、お前に勝ててねえのに」

エルザ：「……………ナツ、それは私も同じだ。勝ち逃げなんてされたくない」

ナツ：「だったらよ……………」

エルザ：「だが……………も、自分の世界に戻らなければならないんだ。ミストガンのように」

「そんなに時間が無いみたいだな」

青年の身体はゆつくりと消え始めた

「ナツ、俺はS級になったが、養父さんを見つけることが出来なかった。・・・お前は必ずイグニールを見つけろよ」

ナツ：「・・・ああ」

「グレイ、お前はその脱ぎ癖をなんとかしろ。そのうち変態扱いされて捕まるかもしれねえぞ？」

グレイ：「・・・努力する」

「ルーシイ、作家になる夢かなえろよ」

ルーシイ：「・・・うん」

「エルザ、お前はもう少し肩の力を抜け、疲れるだけだからな」

エルザ：「・・・解った」

「ウエンディ、ナツと同じだが、グランディーネを見つけろよ。あきらめなければきっと見つかる」

ウエンディ：「・・・はい」

「ガジル、お前はその性格を直せ」

ガジル：「・・・っへ、やなこった」

「ハッピー、シャルル、そしてリリイ、ナツ達の事をちゃんと支

えてやれよ」

ハッピー：「・・・あい」

シャルル：「・・・言われなくても解ってるわよ」

リリィ：「任せておけ」

「・・・マスターたちによろしく言っておいてくれ」

エルザ：「解っている。それよりも、あれをやるぞ」

ナツ：「おう、フェアリーテイルを抜けるものは三つの掟を伝えなきゃならねえ」

そう言い、ナツが拳を前に出した

グレイ：「一つ、フェアリーテイルの不利益になる情報を生涯、他言してはならない」

そう言い、グレイもナツと同じように拳を前に出した

ルーシィ：「二つ、過去の依頼者に濫りに接触し個人的な利益を生んではならない」

エルザ：「たとえ、道は違えど・・・」

ウェンディ：「強く力の限り生きなければならない」

ガジル：「決して自らの命を小さなものとして見てはならない」

「愛した友の事を生涯忘れてはならない」

そして、全員が拳を前に出し、合わせた

「……皆、ありがとう。……また、会おうぜ」

そう言い、青年、時雨龍はマグノリアから消えた

第1話＋プロローグ（後書き）

紅：「5作目の小説が始まりました」

龍：「こりもせずまた書き始めたか」

紅：「つぐ、返す言葉もない」

龍：「まあ、他の奴もちゃんと書けよ」

紅：「ああ。少し遅くなるかもしれないがな」

龍：「まあ、こんな作者ですが。なにとぞよろしくお願いします」

第2話 『帰郷、そして再会』

龍 side

龍：「……………ここはどこだ？」

俺は今、路線の上に立っている

龍：「うーん、見た所、海鳴市ではなさそうだな。匂いからして……………取りあえず、線路に沿って歩くか」

俺は線路に沿って歩いてけば、街に行けると考え、歩き出した

↓それから数分後↓

龍：「うん？」

俺は前からものすごいスピードで走ってくる列車に遭遇した

龍：「幾らなんでも、スピード出し過ぎだろう。それにしても、あの列車から嫌な感じがしたな」

俺はさっき見た光景を思い出していた

龍：「（一瞬だったけど、機械のようなものが外に出てたな）・・・考えても仕方ねえ。追いかけるか」

俺は飛行魔法を使い、今通り過ぎた列車を追った。電車に追いつくと、小さな機械が電車を攻撃していた

龍：「取りあえず、あの機械を全部破壊するか」

俺は列車の上に降りた。俺が降りると、機械が俺に気づき攻撃してきた

龍：「おっと。ふんっ!!」

機械の攻撃を避けると、素早く懐に入り、炎を纏った拳で殴り飛ばした。爆発に気づいたのか、それとも俺を危険と感じたのか、機械がわらわらと列車から出てきた

龍：「おい、おい、こんなにいるのかよ。・・・っふ、なんでも知らねえけど、燃えてきたぜ!!」

俺は両拳を合わせ気合を入れると、機械の軍団に突っ込んだ

龍 side end

六課 side

一週間前に新設された部隊『機動六課』はリニアにレリックが乗せられているという情報を受け、現在、ヘリで移動中だ

ヴァイス：「なのはさん、もうすぐリニアに接触します」

なのは：「うん。さて、新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

リン：「エリオとキャロ、それとフリードもファイトですよ」

FW：「はい!!」

なのはとリンがFW達に激を飛ばしていると

『なのはさん、空中にガジェット反応が多数確認されました』

なのは：「……ヴァイス君、ハッチを開けて、フェイト隊長と二人で空の敵を倒すから」

ヴァイス：「うっす。なのはさんお氣をつけて」

なのは：「うん。じゃ、ちょっと出てくるけどみんなも頑張つてズバッとやっつけちゃおう!」

FW：「はい!!」

そう言い、なのははへりから飛び降りた

なのは：「レイジングハート・エクセリオン。セーット、アーツ
プ」

RH：『standby ready setup』

なのははバリアジャケットを纏い空を舞った

なのは：「スターズ1、高町なのは、行きます!!」

そして、へりがリニアに近づいた

リン：「任務は2つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、そしてレリックを安全に確保すること。ですからスターズ分隊とライトニング分隊、2チーム分かれてガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです。レリックここ、7両目の重要貨物室。スターズがライトニング、先に到達した方がレリックを確保するですよ」

FW：「はい!!」

リン：「で！私も現場に降りて観戦を担当するです」

リンの服が防護服に変わり、いざ出ようとしたとき

『リイン曹長、リニアに未確認の魔力反応が感知されました！！・
・何これ、ガジェットの数がどんどん減っていったる！？』

リイン：「シャーリー、それは本当ですか！？」

シャーリー：『は、はい』

ティアナ：「リイン曹長、どうしますか？」

FW陣の指揮官ティアナがリインに聞いた

リイン：「うーん」

リインが悩んでいると

はやて：『任務の変更は無しや。最重要なのはレリックの確保、そのイレギュラーには後で話を聞く。正し、そのイレギュラーがこつちに攻撃してくるようなら、捕まえるのを許可します』

ティアナ：「は、はい」

そして、FW陣はデバイスを起動させ、リニアに降下した

六課 s i d e e n d

3人称 side

龍：「おおおおおお!!」

龍は外にいた機械を破壊すると、列車の中に入り、奥に進んでいた

龍：「邪魔だつつうの、火竜の鉄拳!!」

炎を纏った拳で機械を殴り飛ばし、その爆発で後ろにいた機械もまとめて倒した

龍：「咆哮が使えるれば一瞬だけど。さすがに使っわけにはいかねえよな。・・・だとしたら、これだな」

龍は両手に炎を纏わせ、そしてその炎を剣の形に変えた

龍：「火竜の炎剣。行くぜー!!」

龍は剣を構え、機械に突撃した

龍：「おら、おら、おら、おらー!!」

機械を切り刻みながら進み、広い空間に出た。すると、天井が壊れ、スバルが降りてきた

龍：「な、なんだ!？」

スバル：「うおおおお」

スバルは右腕に装着したリボルバーナックルで機械を壊すと、その爆発で外に飛ばされた

龍：「……何なんだ今の？」

龍はその場で、茫然としていた

龍：「（それにしても、今の服、あいつのに似てるな。それにさつきほんのわずかだがあいつらが使ってる魔法とおんなじ感じがした。どういうことだ？）」

龍は少し考えたが、今すべきことは、列車の停止だと判断し、少女が落ちてきた穴から外にでた

リイン：「その人、私達は時空管理局です。貴方は誰ですか？」

龍が外に出ると、リインが龍に質問した

龍：「……リインフォース？」

龍はリインを見てそう呟いた

リイン：「どうして、私の名前を知ってるのですか！？」

リインが驚いていると

龍：「っ！！」

龍はリインに向かって剣を投げた

リイン：「っ!」

リインは自分の名前を知っていることに驚いていたので反応が一瞬遅れたが、その剣はリインの通り過ぎ、少しすると、後ろから爆発音が聞こえた

リイン：「え？」

リインが後ろを振り向くと、大量のガジェットがあり、その内の一体のガジェットに龍の投げた剣が突き刺さっていた

龍：「・・・少し離れてろ」

リイン：「は、はい」

龍に言われ、リインは龍の後ろに移動した。龍は一瞬でガジェットの中心に移動すると

龍：「火竜の翼撃!!」

龍は両腕を炎化し、翼のように炎を変化させると、その場にいたガジェットを全て薙ぎ払った

リイン：「・・・す、すごいです」

リインは龍の力を見て、それしか言えなかった

その後、レリックを確保し、列車の暴走を止めると、

リン：「もう一度聞きます。貴方は誰ですか？」

リンが質問した。FW陣はそれぞれの武器を構えており、もし敵なら直ぐに攻撃できるように待機していた

龍：「俺か？俺は………うん？」

龍が自分の名前を言おうとしたとき

龍：「………この匂いは。………まさかつ！？」

龍が匂いの方に向くと

なのは：「皆、お疲れ様」

フェイト：「少し、はらはらしたけど無事で良かったよ」

なのはとフェイトが列車に降りてき、FW達に話しかけた

なのは：「それで、民間人がいたって聞いたんだけど、どこにいるのかな？」

リン：「なのはさん、あの人です」

なのはとフェイトはリンの指をさした方を見ると、驚いた顔をした

なのは：「っえ」

フェイト：「う、嘘」

二人は龍の顔を見て驚いていた

スバル：「あの、なのはさん、フェイトさん、どうしたんですか？
？そんな顔をして？」

スバルが二人の顔に気づき質問した

龍：「まさかと、思ったけど。やっぱ、お前等だったか」

龍は二人の顔を見て笑っていた

龍：「久しぶりだな、なのは、フェイト」

設定

名前 時雨 龍

年齢 19歳

容姿 ゼクスファクターのカイ（髪の色は黒）

使用魔法 滅竜魔法

ランク 元S級魔道士

服装 ゼクスファクター第一弾のカイの服

11年前、なのは達との帰宅途中、黒い穴からなのは、フェイト、はやての3人を守るために3人の盾になり、穴に吸い込まれ、別世界、マグノリアに飛ばされてしまった。そして、気絶している所をナツとイグニールに見えられ、一緒に生活を始めた。ナツと同じく炎の滅竜魔道士^{ドラゴンスレイヤー}であり。ナツより遅く習い始めたのにナツより強くなってしまった。イグニールがいなくなった後はマスターマカロフに保護され、フェアリーテイルの一員となった。ギルドの中ではかなり強く、エルザやラクサスも軽くひねっていた。滅竜魔道士としては珍しく、火以外のものも食べれる。ラクサスの雷を最初に食べた人物でその時、雷炎竜として目覚めた。フェアリーテイルのギルドマークは左肩にあり、色はナツと同じ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8474y/>

魔法少女リリカルなのは～もう一人の火竜～

2011年11月27日20時12分発行